# 雨の降らない雨に。

あるふぁ@空鍋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨の降らない雨に。

【Ｎコード】
Ｎ４４９６Ｕ

【作者名】
あるふぁ@空鍋

【あらすじ】
少し未来。
人間はどこで生きることが正しいのか？
絶対なのか？総体なのか？相対なのか？

**（前書き）**

絶対的精神原則。

精神の死を以て、人格の死とす。

頭を縛り上げるその手には、現実感覚はない。
ただ単に、見える物を信じて過ごしてきた私から言えば、それはありえないことではある。
しかしそれは現実に起こっていないわけであり、、私の目の前にはネクタイで絞められた頭があるのだ。

仮想空間。

私はいつもの通り、ネットワークカメラで半分、自分の目で半分の世界を目にしつつ、
大学までの道のり（だいたい5分ほど）を歩いていた。
昨日までの雨で、すっかり湿った空気の中。
コンビニの前では新商品の情報。ドラッグストア前ではセール情報が、ネットカメラから見えてくる。
現実には何もないのであるが、ＧＰＳや非接触型チップを利用して、それらの情報にアクセス。
私は午後の予定を化粧品の特売に変更せざるを得なくなったと、こういうわけだ。

そして、公園の角を時速3キロほどで通りかかったとき（速度も表示される）私は人がベンチに座っているのを見た。
サラリーマンらしきその人は、一見して普通であるが、カメラを通して見ると、頭の半分が消し飛んでいるのだ。
消え去った頭の半分は、恐らく５０メートル先の樹の上に突き刺さっているものと思われる。
私は親切心からか、その人に声をかける。
「こんにちは」

彼は笑顔で語りかける。
「やあ、きょうはいいてんきですな。」
彼は「笑って」いるが、ネットワークの彼は顔の半分で笑っている、至極滑稽な姿であった。
「あの、大変申し訳にくいのですが、」
「はい？どうかしましたかな？」
彼は不思議そうな顔で私を見上げる。座高は低いようだ。
「ネットワーク情報では、その、頭が半分あちらに飛んでいるのです。」
彼に画像をキャプチャーして見せる。ハンディー端末で。
「あ、これはこれは。」
慌てて立ち上がる彼は、現実世界ではしっかりしているものの、ネットワーク環境の彼は、斜めを向いて変な方向へ歩いていく。
「あ、私がとってきますので、ここで座っていてください。」
彼は思わずはっとなり、その場に立ち尽くしてしまった。
「大変申し訳ない。いやはや。この年になるとどうもおかしくて。」
私は駆け足で木の根元まで行き、彼の半分の頭を樹から抜き取る。

「これはこれは、本当にありがとうございます。」
「いえいえ、当然のことをしたまでです」
彼の頭は自然にくっつかなかったので、彼の仮想ネクタイで頭を縛った。
私はただ見ていただけだったが、彼は慣れない手つきでネクタイを締めるので、私はついつい手伝ってしまった。
「しかしどうして頭が飛んで行ったのか。」
「きっと、何か理由があったのでしょう。」
そうですね。きっと。
彼は、いや、ネットワーク上の彼がつぶやく。
「私の友達で、高校時代に、ネットワークいじめにあって、手を掲示板に括りつけて学校に来た子がいました」

彼はすこしも曇りの無い笑顔で聞いている。
「どうか、ネット自殺なんて考えないでくださいね。」
彼は無表情。
「ネットワークには、人間の自殺なんていう負荷は負いきれませんからね。」
彼は。
「そうですね。どうせネットで死んでも、リアルの体が残るだけだ。」
そうそう。
「ありがとう。若い子に勇気づけられた気がしますよ。」
はははは、という乾いた笑み。
「リアルで死んだって、どんどんキツイ人間に代わっていくだけです。」
私は学校で習ったことを存分に披露する。
「これ以上苦しみたくなかったら、現状に満足するよう、努力することが必要でしょう。」
「本当にその通りだ。」
立派になるといいよ。彼はそう言い残して、私のもと来た方向に歩いていく。

肉体なんていくらでも換えがきく。
しかし精神は構成元素がない以上、同じものは作れない。
精神的にも肉体的にも死が意味をなくした今、
精神の重要性が勝ることは必然である。（精神高貴の大原則）

キキーッ。
後ろで車のブレーキ音。
そして何かがぶつかる音。

彼の肉体は吹き飛び、道路に突っ伏しているが、

彼の精神はその場に立ち尽くしていた。
きっと雨で地面が濡れていたからであろう。マンホールは滑りやすい。
『すいません、事故にあいまして。ええ。池袋の西公園近くです。はい。』
ネットワーク上の彼は、電話で救急車を呼んでいる。
私のネットカメラでは、そう見えた。

**（後書き）**

もしよかったら感想いただければ嬉しいです。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4496u/

雨の降らない雨に。

2011年10月9日02時57分発行